

登校回避感情と友人関係ストレスとの関連について

— 自己概念と対処方略の視点から —

藤 垣 由 美

I. 問題と目的

不登校問題やいじめの問題が注目されるようになって久しいが、これらの問題は一向に減る気配を見せない。それどころかむしろ、増加の一途をたどっていると言えよう。不登校の問題は、長く臨床の現場で問題にされてきたが、最近では健康心理学や臨床社会心理学の立場から、学校のストレスを中心としたストレス研究によってこうした問題に迫ろうとするものが盛んに行われている(長根, 1991; 岡安ら, 1992; 岡安ら, 1993; 他)。近年の傾向では、日常誰にも起こり得るささいな出来事を重視し、ストレスをストレス者の認知的評価と対処の過程からとらえていこうという Lazarus & Folkman (1984) の考えに沿ったアプローチが主流で、学校ストレスも認知的評価やソーシャルサポートといった視点からの解明が試みられている(丹羽・山際, 1993; 岡安・嶋田・坂野, 1993)。

一方、不登校の背後にある登校に対して回避的な感情を抱きつつも、登校を続けている不登校潜在群の広がり(森田(1991)によって指摘されるに至り、潜在的な不登校群とでも呼べるような一群についての研究も行われるようになってきた(古市, 1992)。そこで本研究では、こうした登校への回避感情を抱いている子どもを、さらに明らかにするために学校ストレス研究の枠組みからとらえていくことにした。

学校ストレス研究においては、子どもが学校でストレスを感じるストレス者として、友人関係、学業、部活動などがあげられているが、その中でも、友人関係は「抑うつ・不安」といったストレス反応との関連が指摘され(岡安ら, 1992)、重要なストレス者とされている。また、不登校の臨床的な報告でも、不登校直前のできごととして友人関係上の問題が多いといわれ、友人関係のもつれは子どもが学校不適応を起こす際の引き金となることが多いようである。こうした点から、登校回避感情を抱く子どもたちにとっても友人関係上のできごとは重要であると考えられ、ここでは友人関係のストレスをその認知的評価も含めて扱っていく。この認知的評価については個人の特性と強くかかわるという指摘がある(藤南・園田, 1994)。ある出来事をどうとらえるかということは自己をどうとらえているかということ

強くかかわると言え、対人上のできごとについては対人関係における自己のとらえ方と大きく関連していると考えられる。そこで研究Ⅰは、自己概念(他者との関係における自己)との関連について明らかにすることを目的に行われた。さらにまた、ストレス者に対してどういった対処が有効なのかも学校適応を考える上で重要だと思われるため、登校回避感情軽減に効果的に働くような対処方略を見いだすことを目的に研究Ⅱを行った。

Ⅱ. 研究Ⅰ

目的:

ストレス者としての友人関係を取り上げ、それに対する認知の仕方と登校回避感情との関連を明らかにしていく。同時に、ストレス認知に大きく絡んでいると思われる個人の特性として、他者との関係における自己のとらえ方に注目し、友人関係ストレス認知及び登校回避感情との関連についても明らかにする。また、どういったストレス反応と登校回避感情が関連しているかについてもみていく。

方法:

中学1・2年生263名(男子133名, 女子130名)を対象に質問紙調査を行った。ストレス反応を岡安ら(1992a)の「中学生用ストレス反応尺度」から32項目・4件法で、登校回避感情は、古市(1991)の「学校ざらい測定尺度」から「クラス」という限定のついた項目を除いた11項目・4件法で、友人関係ストレスは、岡安ら(1992b)や丹羽・山際(1991)のストレス測定尺度から友人関係に関する7項目をそれぞれ嫌悪感と経験頻度について4件法で、自己概念は、平石(1990)の「自己肯定意識尺度」の対他者領域に含まれるものから20項目・4件法でそれぞれ回答してもらった。

結果と考察:

ストレス反応は、因子分析の結果、「抑うつ・不安感」「不機嫌・怒り感情」「身体的反応」「無力的認知・思考」の4因子が、自己概念は「人間不信・被評価意識」「対人的積極性」の2因子がそれぞれ抽出された。登校回避感情は1尺度として扱い、友人関係ストレスに関しては、嫌悪感、経験頻度、嫌悪感×頻度得点のそれぞれについて、個々の項目ごとで見えていった。

登校回避感情は、ストレス反応、及び自己概念のそれ

ぞれの下位尺度と、友人関係ストレスについては嫌悪感以外のすべての項目とそれぞれ相関が見られた。ストレス反応との関係では「無力的認知・思考」との関連が最も強く、登校回避感情を強く抱く子どもは意欲が低下している状態にあることが伺えた。友人関係上のできごととはどの子どもにとっても嫌な状況ではあるが、その頻度が多いほど登校回避感情も高くなっていた。また、自己概念とストレスについては、人にうまくかわれない、人の中で積極的に発言していけないという人で、なおかつ、人からの評価を気にしたり、人との関係に距離を感じたりする人は、友人関係ストレスにより多くの嫌悪感を抱きやすいということが示された。また、登校回避感情に対する友人関係ストレスと自己概念の分散分析結果では、「人間不信・被評価意識」の高い人はストレス量の影響を受けやすく、「対人的積極性」と友人関係ストレスでは「対人的積極性」が低い人、さらにストレス得点が高いほど登校回避感情は高まっていた。

Ⅲ. 研究Ⅱ

目的：

友人関係上で起こった問題に対して、どのような対処方略が登校回避感情の低減に有効であるかを明らかにしていく。

方法：

中学1年生209名（男子207名、女子102名）を対象に、登校回避感情及び友人関係ストレスは研究Ⅰと同様の質問を用い、対処方略については Lazarus & Folkman (1984) の作成した Ways of coping をもとに中学生に理解可能なものを30項目選び、4件法で回答を求めた。

結果と考察：

対処方略の因子分析結果から、「積極的問題解決指向」「感情抑制・静観指向」「逃避・被支持指向」の3因子を抽出した。対処方略の登校回避感情軽減効果を見るため、分散分析を行った。「積極的問題解決指向」は、交

互作用と共に、ストレス頻度に有意な主効果があり、頻度が多く積極的問題解決にむけて努力する人ほど登校回避感情が高くなった。友人関係というコントロールの難しい状況に対して、問題解決的なアプローチをとることはかえって負担になるといえるようである。また「感情抑制・静観指向」でもほぼ同様の結果が得られ、こうした状況では、感情を閉じ込めてしまうことは余りよくないのではないかと思われた。「逃避・被支持指向」では特にはっきりした傾向は見いだせなかった。しかし、ストレスの多い人で登校回避感情の特に低い人を数名とり出して検討した結果では、「逃避・被支持指向」をよくとっており、一方の登校回避感情が特に高い人を取り出した結果は、その逆であり人に話しを聞いてもらうことをしないということが示されていた。そばに聞いてくれる人がいたり、誰かに自分の気持ちを話せたりすることがこうした状況では有効な場合があるようであった。

Ⅳ. 総合的考察

本研究は、不登校の背後にあると考えられる登校回避感情を抱く子どもたちをストレス研究の枠組みからとらえようとして、友人関係はストレスについて自己概念と対処方略の視点からそれぞれの関連性を明らかにしようとするものであった。ストレスの認知的評価に影響を及ぼす自己概念に関しては一定の知見が得られたが、対処方略についてはストレスに対して有効に働き、登校回避感情の軽減効果をねらえるようなものは明らかに見いだされなかった。これは、友人関係という、一個人では非常にコントロールの難しい状況を扱ったためと考えられる。しかし、場合によっては、人に相談できたり、援助を求めたりできる人は、それほど深刻にならずに持ち直すこともあることが示されていたことから、こうした状況に対してはソーシャルサポートなどの視点からの検討が今後必要となってくるのではないだろうか。